

2020年4月19日(日)

## 上尾合同教会

聖書 イザヤ書 19:19~20

ヨハネの黙示録 3:9~13

説教 「黙示録⑰—神の宮の柱たる者へ」

武田真治牧師

今日の礼拝より、それぞれのご家庭で礼拝を捧げることになりました。何とか、この時を皆で乗り越えていきたいと願っています。何より神様からのお支えとお守りとを祈っています。

まさにこの新型コロナウイルスが、全世界に大きな脅威を与えているこの状況は、実は、今日の聖書の箇所、今、ヨハネの黙示録を続けて読み進めておりますけれども、7つの教会への手紙第6番目フィラデルフィアの教会の場面に差し掛かっているわけですが、その3章10節をもう一度見てください。新約聖書456頁、第3章10節をお読みいたします。「あなたは忍耐についてのわたしの言葉を守った。それゆえ、地上に住む人々を試すため全世界に来ようとしている試練の時に、わたしもあなたを守ろう。」

「地上に住む人々を試すため全世界に来ようとしている試練」というものがあるのだ。まさに今、このウイルスの脅威にさらされている。これは、全世界に本当に来ている試練の一つではないでしょうか。そして、これは神様が地上に住む人々、私たちを試すためだ。このことを通して、本当に全世界として、このウイルスの脅威にどう立ち向かうか、そしてどう対処していくか、あるいは目に見えない、このものに対してどう対処していくか。普段、目に見えるものに重きを置きながら生きているこの世界に対して、本当に目に見えない存在の、やはり力の強さ。そのことを改めて思いを馳せられる、そのようなことではないか。全世界に来ようとしている試練だと。そう思わせられます。

そしてこの時は、私たち信仰者にとっては、これは信仰が試される時、信仰がふるわれるときでもあるかもしれません。こうして分かれて礼拝をしなければいけない状況。本当にこれは、考えてもいなかった、想定外のことでした。そして、これからも様々に私たちの信仰が試される、ふるわれる、そのような出来事が起こってくるかもしれません。そういう時に、大事なもの、求められるものは何か。今日の聖書の箇所から言うならば、それは忍耐だ、というわけですね。どうでしょうか。

実は、この10節の最初のところ、「あなたは忍耐についてのわたしの言葉を守った。」これは、フィラデルフィアの教会の人たちが、イエスさまから「良く忍

耐したね。」っていうふうに褒められてる聖書の言葉なんですけれども、ただこの「忍耐についてのわたしの言葉を守った。」というのは、何かこの「わたし」というのはイエスさまなんですけれども、忍耐という事について語られた。そういう言葉をちゃんと守ってきたというふうに受け取られてしまいがちなんですけれども、ただ原文、もともとの言葉では、最初に<ことば>『ロゴス』という言葉が来ています。それについて次はですね、実は<忍耐>ちゃんと申しますと、『トーン・ロゴン・テース・シュポモネース』ですね。そして、『モウ』という言葉が来ます。<ことば>そしてその言葉を修飾する形で、『シュポモネース』これが<忍耐>ですね。<忍耐のことば>なんです。そして最後に来るのが『モウ』<わたしの>つまり、イエスさまの、なんです。

従って普通に訳せば、最後から<わたしの忍耐のことば>ですね。新共同訳は、「忍耐についてのわたしの言葉」、『モウ』を<ことば>に繋げておりますけれども、本当は『モウ』は『シュポモネース』につきますから、普通に読めば、<わたしの忍耐、そのことば>なんです。

多分、それでは分かりづらいと思った新共同訳の翻訳者は、<わたしのことば>そしてそれは、<忍耐>についての<わたしのことば>だと、そう分かりやすく訳したのかもしれませんが。でもこれは、本当はここに込められておられるイエスさまの想いということを考えます時に、多分それは、イエスさまご自身が本当に忍耐してこられたんだ。イエスさまご自身が、生涯、まさにイエスさまの生涯、例えば最初から40日40夜、荒れ野で悪魔から試練、誘惑を受けられる。あるいは、ファリサイ派や律法学者たちから、本当にこう言葉でね、いろんな挑戦を受けられたり、迫害を受けられましたし、弟子たち、そして群衆の無理解。イエスさまの事を全然わかってくれない、あるいは、弟子たちから捨てられてしまう、離れられてしまうという、体験もなさいました。

ゲッセマネの園、十字架の道、そして十字架そのものが、まさにイエスさまは忍耐をなさった。「その十字架から降りてこい。そうしたらお前のことを信じてやるぞ。」といったその声を耳になさりながらも、敢えてそのことをなさらないで、耐えていかれた。その忍耐。そのイエスさまは、生涯、その忍耐をなさっていか

れた。そこからの言葉という事じゃないでしょうか。イエスさまの忍耐の言葉なんですよ。もちろん、言い方を替えるならば、イエスさまの言葉は、すべてその根本にイエスさまは忍耐をなさった。そのことから出てきている。そのすべてのイエスさまの言葉を、このフィラデルフィアの教会はずっと守ってきた。聴き従ってきた。それに生きようとしてきた。それは、「よくやったね。」と、そうイエスさまにここは褒められているという事ではないでしょうか。まさに、フィラデルフィアの教会員たちも、忍耐を持ってね、逆にイエスさまの言葉が本当に耐えていくことを、力を得て、そして生きてきた。そのことを褒めておられるのではないのかなあと。

これは何も、フィラデルフィアの教会の人たちだけの言葉ではなくて、教えてではなくて、私たちが今の、特にこの全世界に来てこの試練の時にあってですね、忍耐が本当に必要だと、私は教えられているように、この言葉から受け取ることができました。

なぜその忍耐が出来るか、可能か、というならば、11節に続いてこうあります。「わたしは、すぐに来る。」キリストがこの世界に再び来られる。その時に、今の私たちの困難や忍耐、あるいは、フィラデルフィアの人たちがしてきたその忍耐というものが、報われるのだ。「わたしはすぐに来るからね。」その時にその忍耐が報われるのだ。だから、「あなたの栄冠をだれにも奪われないように、持っているものを固く守りなさい。」

持っているものを固く守りなさい。——ということ。持っているものというのは、自分が得た、自分が手にした、獲得したと言うものではなくて、与えられているものという意味ですね。イエスさまから、神様から与えられているもの、そして与えられて今持っているものを大切にしてください。恵みとして与えられているものを、固く守りなさい。これが忍耐の本当の意味ですね。

与えられているもの、多分これは一番大事なものは信仰だと思います。信仰は私たちが自分で手にするものではなくて、神様イエスさまから与えられるものなんです。そして、その与えられているものをずっとね、生涯守り通していく。それが私たちの信仰者の歩みだろうと。そのために、何が必要か。やはり、忍耐すること。これが大事だよっていうんです。

そして12節「勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。」これは、持っているものを固く守りなさい。そして、生涯その持っているもの、つまり信仰をね、固く守りなさい。守った者が12節「勝利を得る者」なんです。そう、ここは続いています。

逆に言うと、信仰における勝利、と申しますか、私たち、信仰者、勝利者、という元々の言葉なんですけど、勝利者、信仰において勝利をした者っていうのは何かって言うと、持っているものを固く守ってきた者なんです。与えられてきた、その恵みや特に信仰を生涯守り続ける。いろんなことがありますし、まさにこの試練の時が今来ております。もう全世界にいろんな状況があって、それは、私たち信仰を持っている者を、むしろ揺らいで、揺らがすような、なくさせるような、そういういろんな現実・状況があるわけでしょう？でもその中で、その与えられているもの、持っているものを固く守り通すことができたならば、それが勝利者なんだ。というのが、この12節の言葉なんです。

逆に言うならば、私たちの闘いというのは、その与えられているものを守るか、守らないか、守り通せるかどうか。これが私たちの信仰の闘いなんだ、ということではないでしょうか。与えられた命、信仰すべて、恵みをです、生涯持ち続けて固持していく。そのことが、私たちの闘いなんだということを、今日の箇所から学ばされます。

そのためには、逆に言えば<忍耐>ということが、ここで求められるのではないかと。「保っていくためには、耐えていくということが必要だよ。」と。「あなたは<忍耐>についての私の言葉を守ったのだ。」と。「わたしは、すぐ来る。あなたの栄冠をだれにも奪われないように、持っているものを固く守りなさい。」「与えられているものを固く守りなさい。」「勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。」と。

このことについてですね、少し余談になるかもしれませんが、先々週のことになりましたが、私たちの教会のある方からお手紙をいただきました。その方は礼拝に出ることを自ら自粛なさった方なんですけれども、私たちはすでに体に不調がお有りの方は、どうぞ礼拝を休んでくださって構わないですよ、ということ。

あるいは、ご家族の方がこんな時に礼拝に出るのか、ってね。心配なさっておられる、そういう声があったり、ご家族の方がそうおっしゃるならば、是非、そういう時には礼拝休んでくださいって前もって言っておりますし、実際私たちが無症状、症状に出ない感染者である、そういう可能性もあるわけですよ。ですから、例えばご家族に看護師さんとか、そういう医療関係者がおられるということならば、気を遣われて礼拝に出ないということは当然のことと、私どもは思い、またその様に皆さまにも申してきたんですけれども、その方はこうおっしゃるんです。

自分がこの時、自主的に礼拝に出なくなった。出ないようにしているってことは、イエスさまのことを私は知らないで逃げ出したペテロの心境のように思えるのだ、と。思えて、苦悶しております、と。そう書かれておられました。つまり何か自分の都合で、自分の勝手な都合で、イエスさまのことを知らない、知らない、知らないで三度言ったあのペテロさんのようにね、今、自分はそうやって逃げちゃっているんじゃないかと。それがいいんだろうか、悪いんだろうかと、そういうことをね、本当に今、悩んでいる、苦悶していると、そういうお言葉、お手紙だったんですね。私はそれを読ませていただきまして、ああ、この方のね、何と信仰の深さと言いますか、やあ凄いなと逆に感動いたしました。まあ、そこまで深く捉えておられる、考えておられるのかということ、教えられたんですね。でも、敢えて申しますけれども、そんなふうには考えられなくていい、と私は思います。逃げるなんてね、そんなことじゃないと思います。逃げているなんて考えられない方がいい。今はまさに、<忍耐>の時です。ですから、それぞれの持ち場、持ち場で、それぞれが耐える。そういう時ではないでしょうか。

そして大事なことは、与えられているもの、持っているものを守っていく。それを何より大事にしよう。信仰をね、本当に持ち続けることを第一にしよう。それが、今日の箇所です。言われておりますように、勝利を得る事なんだよ、ということなんです。どんなことがあっても、神様を見失わないで生きていくこと、そのことが大事だということではないでしょうか。私はそう改めて思わせられます。

実は、今日の聖書の箇所、特徴的だと、とても特徴的だと言われていること

は、実はこの後の言葉なんです。12 節をもう一度見てください。「勝利を得る者を」、この勝利を得る者ですね、これは持っているものを固く守ってきた者ですね。それは勝利を得た者なんだと。勝利を得た者を「わたしの神の神殿の柱にしよう。」これが、非常に面白いと申しますか、特徴的だと言われている表現なんです。

「わたしの神の神殿の柱にする」というのは、どういうことかと言うと、天の御国ですね。天の御国での神様を礼拝する、そういう教会、礼拝場所です、神殿です。そう考えていいと思います。天の御国に行った時に、フィラデルフィアの試練の中を通り抜けてきて、与えられていたもの、持っている信仰を守り通してきた勝利者については、その天の御国に行った時に、その神様を礼拝する神殿、教会、その教会の柱、つまりその教会を支える、その神殿、その場所を支える、その群れを支える、そういう存在にするんだという事。約束の言葉なんです。 「わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。」のだ。

なぜ急にね、柱とか、神殿というのが出てきたのかということなんですけれども、おそらく、この背後にあることは、当時のフィラデルフィアの教会、あるいはその町独特の状況があったのではないかと、いうふうに言われています。それはどういうことかと申しますと、このフィラデルフィアの教会の前に、3 章 1 節からのサルディスという教会の時にも少しご紹介したことなんですけれども、ちょっと前に、この手紙が書かれた少し前に大きな地震がこの地域に何回かあったんです。特に大きかったのは、AD17 年にこの地域一帯を襲った大地震があったそうであります。文献によりますと、このフィラデルフィアの町を含めて、その周辺の 10 余りの町が一辺に破壊されてしまったほどの大きな地震が起こった。サルディスの町も破壊された、崩れてしまったんです。

まさに、フィラデルフィアの住民は地面が大きく揺れ動く、地のもとふるい動く体験ですね。体験をして、そして本当に多くの人たちがそこで犠牲になった。その後も、他の町は 1 回その大きな地震が来て崩壊して、再建をしていくんですけれども、フィラデルフィアの町はその後も、いわゆる群発地震。そのあとも

何回かその地震の影響、大きな地震の後で起こる地震に悩まされたというふうに言われていますね。

そして、住民の中には、もうこのフィラデルフィアの町には住めないと、こんな地震の多くある町には住めないと、この町に見切りをつけて、郊外やあるいは他の町に移住をした人たちも実は出ていたんだと。あるいはそのまま町に残っていた人たちも、いつまた大きな地震が発生するかもしれないと思ってですね、いつでもこの町を出て行ける、避難できるような、そういう意味では準備、被災の対策をしていた、そういう町であったそうあります。

そのことが、このイエスさまの、フィラデルフィアの住民に対する、教会の人々に対する、約束の言葉・祝福の言葉になっていたのではないかと、いうのです。12 節「勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。」というの、もう天の御国に行った時には、もう動かない、しっかりしたその教会を支える、そういう柱にあなたちをするよ。そして、「彼はもう決して外へ出ることはない。」のだ。もう地震を恐れたり、あるいはこれが崩れてしまう、自分のもとへガラガラっと崩れてしまうようなことを恐れて、もし地震が起こったら外へ出て行こうという必要ななくなるんだよ、って。祝福なんです。天の御国に行った時に、あなたたちは怖い経験をしてきました。大変な地震の中を、そうして生き抜いてきた。そのことに対して、天の御国ではしっかりと土台に立つ柱と、あなたたちをするよ。そしてもう二度と、そんな町を出て行かなくてはいけない、あるいは町を出ることを想定しながら、びくびくしながら生活することはない。天の御国でそのような祝福が与えられるんだよ、ということね、イエスさまはフィラデルフィアの教会の人たちに約束したんだ、ということが言われています。なるほどなあ、と思います。

ここから私は、もう一つ学ばされることはですね、「天の御国での神の神殿の柱」、つまりその、天の御国の教会を支えるメンバーですよ。「柱にしよう」教会を支える、その様な者にしてあげるよ、というふうにイエスさまはおっしゃっておられるというのはですね、なるほどなと思いますのは、このフィラデルフィアの教会の人たちは恐ろしい地震を経験したわけじゃないですか。そして、そこ

でまさに父のもと、ふるい起こるような、今日の箇所と言うならば、全世界に起こるような試練ですよ。人々を試す。そのような大きな出来事があったわけですよ。その中で彼らは、与えられているもの、持っているものを固く守り通してきた者たちなんです。いろんな試練が、厳しい、辛い状況もあったでしょうし、悲しい出来事も経験したでしょう。それこそ、家族が傷ついたり、いろんな厳しい状況があったと思います。その中でも本当に何とか、それこそ何とか信仰を保ってきた、与えられてきた信仰を保ってきた。だからイエスキリストは逆に今度こそ動かない、その柱にすえよう。もう出なくていいよ。逃げなくていいよ。というふうにおっしゃっておられるわけですよ。それは逆に言うならば、一度も振るわれたことがないような、それこそ何とかな、幸せな状況で毅然として、信仰的にね、何の問題もなく全う出来た人が、その教会の柱にされるのではなくて、言い換えるならば、「天の御国の神の神殿の柱」はですね、振るわれてきた者が、本当に厳しい試練を受け、そして辛い経験をしてきた中で、それこそ試練を受け、振るわれる、自分の信仰が振るわれるような経験をしてくる、それを乗り越えてきた者だからこそ、「教会の柱」となれるんだ。そう受けとめることもできるのではないのでしょうか。

教会の、天の教会の柱とされる者は、いわば試され、厳しい経験をし、それをしかし何とか乗り越えてきた。迷ったり、苦しんだり、これでもか、というような辛い状況を、しかし乗り越えてきた。その中で何とか与えられたものを保持し守ってきた。＜忍耐＞をもって、それを守ってきた者が天の御国では本当に教会の柱、もう揺るがない天の教会を支える存在にされるんだよ。いやむしろその方が、その者こそ揺るがない信仰の土台にしっかりと据えられる。そのようになるんだということではないかなあと、私たちもまた、これは単にフィラデルフィア教会の人たちの言葉だけではない、約束の言葉だけではない、そう思います。私たちへの約束の言葉ではないのでしょうか。

いろんな試練や厳しい状況、自分の信仰が振るわれる、もうダメかもしれない。もうこれ以上いっただら壊れてしまうと思うような経験を、私たちも与えられます。試練の中におかれます。その中で、何とかしかし、我々の闘いというのは、

与えられているこの信仰を持ち続けることだよと、この箇所で言われています。それが勝利者なんだ。勝利を得る者なんだ。その者は、天の御国で必ず報われるんだよ。イエスキリストが本当に支え、柱として教会を支える者として据えてくださるんだと。そしてもう、その者は二度と決して外へ出ることはない、追い出されることはない。その真の教会の中で、しっかりと生きていく。そのような復活の命が与えられるんだよと、言われていることではないでしょうか。

そしてさらにですね、この教会に関わることとして、このようなことが次に出きます。「彼はもう決して外へ出ることはない。」次ですね。「わたしはその者の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都、すなわち、神のもとから出て天から下って来る新しいエルサレムの名、そして、わたしの新しい名を書き記そう。耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。」と。これも実は地震と関係しているんじゃないかとされています。

なぜかと申しますと、その紀元 17 年の地震が起こって、フィラデルフィアの町が崩壊しますね。その再建の時に、当時のローマ皇帝のティベリウスという皇帝が、援助したんですよ。そのフィラデルフィアの町を再建するためのお金を寄付、援助してくれたんですよ。そのフィラデルフィアの町の人たちは感謝をしまして、ティベリウスに感謝を表すためにフィラデルフィアの町の名前を、ネオカイザリアという名前にわざわざ替えたんですよ。ネオカイザリアというのは、新しいローマ皇帝カイザルの町、持ち物だという意味ですね。新しいローマ皇帝、つまりティベリウスの、あなたの、あなたに捧げますっていうね。そういう思い、感謝の思いを名前で表した、名前を替えたんですよ。

また、申しましたように群発地震が起こって、さらに何年か後に起こった地震の時には、今度は、また違うローマ帝国のベスパシアヌスという皇帝がまた援助をして、フィラデルフィアから替わったネオカイザリアを支えて、お金を寄付してくれたそうです。そしたら、またその町の人たちは名前をネオカイザリアからフラビアという名前に替えたそうです。このフラビアというのはフェスパシアヌスの家族名ですね。家族の名前のものという意味で、フラビアという名前にしたんだそうですね。

だから、何回も名前を替えている。ということは、面白いなあと思いますけれども、ここでそのことを踏まえながら、多分天の御国に行った時に名前を替えてきた町に住んでいたクリスチャン、信仰者、信仰を全うした者には、「その者の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都、すなわち、神のもとから出て天から下って来る新しいエルサレムの名、そして、わたしの新しい名を書き記そう。」と。もう皇帝の名前、ネオカイザリアだとか、皇帝が違って援助してくれたら今度はフラビアとかね、そんなふうには名前を替える必要はもうないのだ、と。

今度は、天の御国においては、神様の名前、そして新しいエルサレム、イエスさまの名前が記されるということは、そのものが、イエスさまの名前が書いてあるものは、イエスさまの所有となるという意味であります。ですから、神の名が記されるということは、あなたは神様のものだよ。そして、エルサレムの名が記されるということは、このエルサレムの住民だよ。新しい天の御国の住民なんだよ。そして、「私の新しい名を書き記そう。」というのは、イエスさまの名前がそこに記されて、あなたは私のものだ。もうずーっとそのように記されるんだ。そして、もう外に出て行く必要ない。あなたはこの御国の、神殿の柱として、生きるんだよ。と。これが復活、私たち一人ひとりの復活の朝に与えられる恵みの名前だということをここで示しているのではないのでしょうか。

私たちもまた、天の御国へ行って、その生涯の信仰を全うすることが出来た時に、「良くやった。」とイエスさまから褒めてもらって、私たちが神殿に迎え入れてくださって、私たちが柱とする。そしてそこに、私たちに手ずから名前を記してくださる。「あなたは私のものだ。もう、どこにも行かない。ここで、真の平安と慰めが与えられるんだよ。」その時が与えられるということ、はるかに臨み見ながら、その主を見上げながら、この試練の時に<忍耐>をもって、私たちに与えられているものを大事にしながら生きていく、そのような歩みをしていきたいと思えます。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま それぞれの場所で礼拝をしなければいけない状況を主よ、憐れんでください。

どうぞこの日本を、そしてこの世界を、主よ、憐れんでください。

どうぞ私たちの罪を赦し、あなたを畏れないでいたその日々を本当に懺悔いたします。

どうぞそのような私たちを、

にもかかわらずあなたが救いの手を差し伸べてくださいますように。

そしてまたいつか、この地上であなたの御名と一緒に賛美する、その時の礼拝を与えてください。

そしていつか、あなたの御許に召されるまで

あなたの天の神殿へと迎え入れられるその日まで、

私たち一人ひとりが与えられている信仰を、恵みを、

全うすることができますように導いてください。

み名によって祈ります。                      アーメン